

2021年2月24日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科

修士論文

肺癌高齢者を対象とした
在宅モニタリングに基づくテレナーシングの実践と混合研究方法による評価：
症状の特徴と本人の経験に焦点を当てて

**Evaluation of Telenursing with Home-Monitored Older Adults with Lung Cancer
Using Mixed Methods Research: Analysis of the Characteristics of the Symptoms
and How to Deal With Treatment at Home**

19MN024

原田智世

要旨

【目的】 がん薬物療法中の肺がん高齢者に対する在宅モニタリングに基づくテレナーシング中のトリガーポイントによる症状の特徴と、治療に対する意識や行動の主観的な経験を統合することで事例を深く解釈し、これら利用者に必要なテレナーシング支援の在り方を検討する。

【方法】 がん薬物療法中の65歳以上の肺がん高齢者に2名に、収斂デザインを用いた混合研究法ケーススタディを行った。亀井ら(2003, 2014, 2020)の開発した在宅モニタリングに基づくテレナーシングシステムを用い、テレナーシングを3ヶ月間提供した。対象者が、毎日バイタルサインズ、体重、歩数、睡眠時間を測定し、症状等の問診項目をタブレット端末へ入力し、結果を看護モニターセンターへ送信した。看護師が、受信データをモニタリング、トリアージ、看護相談・指導、テレメンタリングを提供した。トリガーポイントは担当医師と対象者毎に設定した。3ヶ月間のモニタリングデータ、トリガー該当情報を収集し、1ヶ月毎のKruskal-Wallis test、トリガー該当日群と非該当日群のMann-Whitney U testを行った。テレナーシング開始時、1・3ヶ月にQOL等の質問紙調査を行った。半構造化面接と看護相談・指導時の対象者の語りを収集し、質的記述的方法で分析した。これら量的・質的データは、TN導入初期・中期・後期に区分した結果を3回統合し、ジョイント・ディスプレイに示してメタ推論を導出した。

【結果】 88歳女性1名、72歳男性1名に本研究を実施し、トリガー該当率は各々12.9%、41.5%であった。トリガー症状は乏しい傾向にあったが、歩数の量的変化と主観的な体調の関連が見受けられた。また、対象者1名はトリガー項目に沿った主体的取り組みを行っていた。対象者は、毎日の計測と遠隔地の看護師とつながることで身体理解を深め、安心感を得て精神面QOLを維持・向上させながら療養生活を送っていた。

【結論】 テレナーシング中のトリガーによる症状の特徴と、利用者の主観的経験の関連を、混合研究法を用いて統合し、解釈した。本事例の肺がん高齢者のトリガーによる自覚症状は乏しく、併存疾患によりトリガー該当頻度が異なることが示唆された。一方、トリガーによらず歩数と主観的体調の関連がみられ、対象者の体調変化は歩数の量的な変動として現れることが示唆された。対象者は、テレナーシングを通して身体理解を深め、トリガー項目に関連した主体的取り組みを行い、体調管理に役立っていることが解釈された。また、精神面QOLは概ね維持・向上し、見守られる安心感をもち療養生活を送っていた。肺がん高齢者に必要なテレナーシング支援の在り方は、対象者が日々の計測から身体理解を促す働きかけや、主体的取り組みへのポジティブフィードバックを行い、体調管理への意欲向上に寄与する必要があると考えられた。また、ICTを活用し、テレメンタリング等を行い、遠隔地の看護師とつながることで、社会的交流の1つとして機能することも重要と考えられた。